



岐 蘇 林 多

目次

研究

渡鮮一年有半

隨筆

東西南北

思出の旅

御料林視察の記

雜報

山林校便り

運動會記事

校友會便り

其他

大正六年十一月廿五日 第九拾七號 每星期日刊 第三十三卷四月十六日 第四十號

研究

渡鮮一年有半

坂本光太郎

題に『鴨綠江畔より』と題し、林友の餘白を拜借して、朝鮮の人情、風俗を紹介した引續きて氣候、風土、産物、交通及教育等に就き紹介せむと思つて居たが、不圖病魔の手に捕へられ、入院加療の己むなきに至り、遂に折角の計劃も、挫折せられ、此の數十日間の病院生活は、あまりにそれが退屈であつたので、病苦のかたはら徒然なるまゝに、今茲に『渡鮮一年有半年』と改め、余が渡鮮以來今日迄に、見聞せし事どもを記憶より呼び起して、書きつらねたるに過ぎないから、小説でもなく、又諸兄の紀行文の如く、趣味あるものでも無く、言はゞ一種の下手な坐談の様ももので、面白くない事は無類であるから、餘程辛抱しないと、欠伸が出たり、眠氣が差したりして、讀み切れまいと思ふ。た負けに話が諄々、文章も亦、拙劣で短くない、而して前文と、重複する様もあるかしれない、其の邊は豫め此處に断りをして置く。

△故郷を去るの辭▽

あはれ懐かしき汝故郷よ、森よ、流よ、野よ、山よ、吾今郷を離れて、白雲千里の遠き、異郷に去り行かむとす。嗚呼此幾年吾

が汝に、受けたる恵は、そも幾何ぞ霞たなびく野の末に、友と手を携へて、胡蝶を追ひスミレを摘みたる春もありしよ。紅葉がさやく山の奥に、刑棘に足を傷めつゝ栗を拾ひ柿を喰りたる秋もありしよ。今や、別に際して、そぞろ積年の情愛を、思ひ來つては、殆んど、斷腸の思ひに堪へざらんとす。さば山水……さらば故郷……いざや吾は行かむ、さりながら噫、汝よ……さすがに吾や、萬里程遠き異郷にありて曉寒き客舎に、そぞろ故郷の空懐しく思ふ事もあらば汝は常に其の音信を忘るゝ事あかれ、東風吹かば又も美はしく花咲けよかし。白露置かば又も麗はしく紅葉せよかし。やがて吾が業なりて、歸り來ん時喜びの聲を揚げて、樂しく吾を迎へよかし、と笈のたもとに、墨跡を留め、大正五年四月五日早咲きの梅花が、將に笑はんとする頃、M君、C君、及び、熊本行きのM君、O君等と共に汽笛一聲なつかしき木曾の天地に別を告げ、西に向つて運ばれた。

△木曾より馬關○○○○

麥の濃尾平野を横切り、夕日に輝く金城を右に須磨、明石、舞子、の夜景を車窓より左に眺めつゝ、修學旅行當時の、懷舊談に耽り、車中に一夜を明かし、岡山に着いたのは翌朝の五時頃にして、夜も白々と明けて、野面の緑が、寝ぼけた目を覺して呉れた、畦に咲く蓮華も、まだ夜明けの故か色が淡く見えて、山の麓に霧が立つて居た。

廣嶋の西條驛にて、君に面會し、鐵路六
百哩も恙なく、午後七時半馬關にて列車を
すて、熊本行き二人は直ちに乗船して九
州に移り、自分も早速連絡船にて、渡鮮し
やうと新義州迄の切符を買ひ求め、先に送
つてあつた荷物を受取り改め發送方を、依
頼し切符を渡したる處が、係員あかしの
スマシグにて、鼻で、あしらつて居たが
、不注意のため其の切符を失ひ、あらゆる
荷物を獲へし残る隅を採したれども、終
に見當らず。先のスマシグは、何處へや
ら俄かに、猫撫聲となり詫言をする、驛長
からは大きき目玉を丁載する、多分始末書
迄も書かせられ、拾四圓六拾四錢の辨償迄
もさせられた事と思ふ。そんな事で連絡船
には乗り遅れ、驛長よりは、當驛係員が荷
物取扱ひ中不注意のため、切符を紛失した
るに依り之を以て乗船及乗車券に代へるこ
ろに依り之を以て乗船及乗車券に代へるこ
いふ様な證明書を受取り、身も永の旅に疲
勞して居たれば、其夜は其處の或旅館に宿
つた。明日は愈々汽船にて、朝鮮に渡るか
と思へば、一種言ふべからざる、樂みがあ
つた。

△馬關より釜山○○○
明くれば七日朝乗船すべく改札口へ赴いた
。そこに珍らしい服装に、薄鬚を生し手に
は、大きき雁首の長い煙管を握つて、立つ
て居る二人があつた。あれが朝鮮人だとい
われて、初めて朝鮮人を見た。自分は色々
と朝鮮を想像し乍ら、棧橋の方へ歩を運ん
だ。

だ。そこには三千七百噸の大船萬龍丸が、
人待ち顔に横づけになつて居た。携帶品の
検査を受け六圓を奮發して二等室に乗り込
んだ。同室の乗客は、朝鮮守備に赴く將校
二名、新聞記者及學生一名、自分等の他
に、神戸より来たとかで八十二才の老婆さ
んが一名と、同行の頭禿げた五十前後の
男と、都合十名であつた。午前十時十分天
地も震動せんばかりの汽笛を合圖に三千七
百噸の長鯨は、黒煙濛々と波を蹴立て玄海
指して、乗り出した。甲板に立つて、遙か
に沖を見渡した時、遠く山脈の如く見出し
は、玄海の波であつた。
灘にさしかるや、波はいよいよ高く益々
激して、吾々が高麗丸を弄び、山なす怒濤
押し寄するを見るや船体は左右に傾きて、
波は甲板を打ち越さんばかり、猛りに猛り
すはと思ふ間もあらばこそ、忽ち海底に吸
ひ込まれるやうに引き下げられて、舟はイ
モリの腹の如き、横腹を數尺も現はして、
丈餘の波間に在り動搖に動搖して、恰も波
に漂ふ木の葉の如く舟客は、あちらにころ
り、こちらにころり、玉轉しの様に……
船の浮き上る時は飛行機にでも乗つて、空
中高く上る心地がする、(余輩は未だ飛行機
に乗つた経験がないから想像である) 上る
時は未だくも、下る時の氣持の悪い事と
いつたら話にならない、舟と体とは慥か
に、離れて丁度高い所から、空中に落され
る様な氣がする、これで大抵の者は參つて

しまふのである。正午にはM等二人と、他
にも二人食堂へ行つて、来た様であつ
た、しばらくすると學生が一番先きに……
すると彼方でも……此方でも……と盛んに
やり出した。自分は別に變つた事もないの
で、折々窓から顔も出して、激浪の躍る様
を眺めて、G君にも見るべく促したか、彼
は少し眩暈がするとかいつて、心配して寝
てゐた。其の中にM君も目を白黒して……
唸つてゐるので自分は、脊中をさすつてゐ
たが、頭痛がし出して来たので、これは眠
るに如くはかゝり、仁丹三粒を口に含んで
海上に一睡を試みた。然るに八十二才の老
婆はと見れば、こはさしたる疲勞も覺わさ
る様子、禿頭の男はしきりと、老婆さんを
勞つてゐたが、此の老婆さんの元氣と、此
の男の鄭重なる、取り扱ひ振りに、余輩
をして、不尠感服せしめた。余の経験上こ
んな時には、無暗に物を食べないで出來得
る限り空腹でゐるに限る、さうすれば……
少々蓄しつても決して……をやつて醜態
を演じ苦しむ事はない。
かくして對馬海峡もすぎ、西山に日の没す
る頃は、稍波も静かになり、昔少々元氣を
快復し、來り、十時間百廿哩の航程も、難
なく過ぎて、遙か向ふに數多の燈火を、認
める様になつた。すると構内へ這入りまし
たから、下りの御用意して下さいといふ
ボーイの注意に、手荷物を取り纏め、今數
分間にして、新領土の空氣を呼吸する事が

山來るかと、心ひき……喜んだのであつた
十時四十分釜山驛に、甲板に立つて見下
せば、棧橋には多の内地人、或は白衣を
著けて、冠の如き物を被つた、下關で見た
のと同じ鮮人が、吾々吾々を仰いでゐた。
雜踏する中を押し分けて、此處に初めて、
朝鮮に第一歩を、踏みしめたのである。
此處で少憩すべく、棧橋を歩行して構外に
出ようとした。其處に驛名を、大きく横に
漢字にて、釜山と記してあり、其下に少し
小さく、何んぞか書いてあつた。するとM
君の妻は釜山、皆外と書いてあるから、
此處が出口ですわねと、いつたが、その時
は、それと信じて居たが、三ヶ月程にあつ
てそれは、皆外でなくして、朝鮮假名にて
「プサン」と書いてあつた、いふ事が解り
笑つた事がある。構外を出ると、鮮人の男
子は、皆梯子に杖のある様な者を背負つて
荷物を運搬して居る、總ての物の運搬法は
此の式であるから、面白い宿の客引、或は
運送の男と見れば各自に記提灯を携へて行き
交ふ朝鮮人と、何かしきりにベチャベチャ
話し合ふて、行くのであるが吾々に解らう
筈はない、耳新らしい朝鮮語であるのだ。
釜山は純然たる日本街にして、一見内地と
異なる所がなく、夜の事であるから、廣く
は解らないが、唯白衣の朝鮮人が澤山通行
するのを見受けて、自分は今朝鮮の地を踏
んでゐる事に氣がつく位である。

△釜山より新義州
其夜の十一時内地になき廣軌鐵道に身を
托して釜山を發した、此の鐵道は歐洲まで
も續いて居るかと思ふた時には、愉快に感
じた、第一汽笛の音から違ふ、列車の箱の
幅が廣い、凡ての構造が内地の夫れとは、
異つて居て、窓は開けるにも、便所の出入
にも、面喰つて、便所の中にて立往生を爲
し、大聲を發して、戸を叩き助力を請ふと
云ふ、滑稽も演じた。
茲に厄介なのは吾輩が、汽車、汽船の乗り
降りに、一々證明書を擴げて、御覽に入れ
なければならぬ事である、列車は絶えず、
進行して新境へ新境へと、導いて行くので
あるが、獨の事であるから、窓から首を出
しても、石炭のごみより外には、何物も目
に入る物はないので、首を引き込めてゐる
と、傍に腰かけてゐる朝鮮人が、余の袖を
引きて、何かしきりに言ふので、何かと
聞き正しても、互に不通で、頭を振ると朝
鮮語が解らんと、思つたと思つた、今度は手
真似で示した、夫れは寒いから窓をしめて
呉れといふのであつた。
車内を見渡せば、黒衣の支那人と、白衣の
朝鮮人とが、過半数をしめてゐる、朝鮮人
の煙草の臭と支那人のニラ臭いので、頭痛
がして卒倒する様な氣がした。
鮮婦の上着は思ひ切つて、短かいので大き
な乳房が、上着と袴との間から脱出して居
る、男の上着は之より稍長いけれ共、パツ
チがすつと、押し下つて下腹が露出して、

臍の穴が風に嘯いて居る、然し多くの者
はツルマキを著て右前には、長い紐を男
結びにして垂れてゐた、頭には皆黒い笠と
も冠とも區別のつかぬ、様か物を戴き、必
ず一本宛長い煙管を握つて居る、男も女も
半長靴に似た白い朝鮮足袋(ボッシ)に朝鮮
草鞋で身を固めて、大きき聲で笑つたり、
話したりしてゐるが、何が何やら馬の耳に
念佛で少しも解らぬ。
澤夫が驛名を、呼ぶ昔も朝鮮語化してゐる
車中に新開地の第一夜はあけて、太田につ
いた頃は、東が白んで来た、窓から首を出
して、沿道を眺むれば、点在する人家は恰
も牧場の豚の如くばんやり目に映じた、
夜は全く明け放れた、再び窓より首を出し
て、車外に眸を放てば、満目荒涼慘憺たる
秃山、曠野の起伏は、之れ車窓より眺めた
る光景であつて、此の面積實に一千數百萬
町步であるときいて、誰か驚かざる者があ
らうか。諸所に藁葺屋根にて、高粱の穀も
て垣を造らした豚小屋(ハンカチ)の朝鮮家
屋が小部落をなしてゐる、而して其のあた
りを鮮婦が、水甕或は些細なる物までも、
露して兩手を振りつ、外輪に徒跣のま、
濶歩する様は一寸内地では見られぬ、奇風
である、そして沿道見渡す限り小丘は、饅
頭塚の墳墓にて、覆はれ丁度饅頭屋の店先
の様な奇觀を呈してゐる。

各停車場附近には、小さい驛でも驛員の住

宅と、其の外に日本家屋が二軒有る、朝の九時頃になると、何處の停車場にても、朝鮮服と海軍帽とを被つた、公立普通學校(内地の尋常小學校に等しきものにて修業年限四ヶ年)の生徒が数人昇降するのを見る、彼等は大抵普通一般日常使用する、日本語は談せるのである、然も夫が標準語である、吾々日本人が語をするに彼等は喜んで聞いてゐて、一々丁寧に返事をするのである。朝鮮鶴の飛翔するのを眺めつゝ、平壤もすぎ定洲の邊にて、朝鮮の一人婦と乗り合した、二歳許りの可愛らしい児を抱いて居たので、退屈のあまり皆で其の子供を相手にしてゐたが、此の婦人少々日本語が解るものと見れば、ワタシニツボシガミ結ウテニツボシクフキタコトガアリマスデゴザイマス」といつたので一同思はずき出した。次ぎには一人の鮮人が、停車場を乗越つて狼狽し、乗客案内の日本人をよぼよぼと呼びかけた。するとM君は日本人をヨボヨボと呼ぶは、失敬な野郎だと憤慨してゐた。かくして新釜間六百哩の鐵路も茲に終り、汽車の着いたのは夜の八時半新義洲新義洲と呼ばれ、扉を排してブラツトホームに立つた、此所が朝鮮鐵道の北端である、ステーションは赤煉瓦造りの三階建てにて、上はステーションホテルとあつてゐて、流石に立派なものであるから、新義洲も相當に繁華な都會であらうと、想像しながら、O君に迎へられて驛外に出た、所

が見渡す限り眞の暗にて、あたりには人家らしいものは、一つも見えない、呆然としてゐる。支那人の車夫が数人クルマブローチを背負つてチツキチツキと周囲を取り巻いて、少々小氣味悪く感じた。荷物を車に托して、自分等は、O君に案内されて歩み出した。四月八日といふ既に、春も半ばであるのに、北風だけあつて、此處にはまだ寒い夜風が吹いてゐた、彼の向ふに電燈が澤山あり、並んで居るだらうあれが、即ち東洋第一の鴨綠江の鐵橋だ立派だらうと、鐵橋の夜景を紹介して呉れた、同轉式の鐵橋の説明をきくと、薄暗い電燈の下をしばらく歩いて来たが、何處にも家らしい家も、街らしい街もない、さある角へ來ると此處が新義洲一の岩田旅館と教へられるまゝに此所に泊る事にした。新義洲一の旅館のある位の所ならば、街の中央とたもはれるが、何處を見廻しても街らしい所はないあの電燈のともつて居る門が、營林廠だと言はれる方を見たが唯ぼんやりと、青いベシキ塗の門より外には何物も見えなかつた女中に案内されて、部屋へ這入つた、見れば墨ではなく花塗を敷いて有る。何んだ之は。成程新開地だけに、新義洲一の旅館と雖も産が敷いて有る位と、思つてゐると、これが所謂オンドルで産の下へ手を入れて見給へ温いだらうと、いはれ替つて凱旋した兄からしばしばきいてゐた縁の下で火

を焚いて、其の煙が床下へ廻り尻の下が温まるといふ、話を思ひ出して、産を敷いて有る理由も了解する事が出来た、夕飯の時、女中に、ヨボヨボは朝鮮人といふ事ではないかと、きくと否ヨボボは内地のモシモシと同じですよと聞いて、車中で憤慨してゐたM君は笑つてゐた。四月九日鴨綠江畔に眼が覺めた。M君の夫婦は、舊義洲へ向つて出發した(舊義洲に今年三月或日曜日を利用して、二三度友人と遊んだ事がある。新義洲より四里炊流の地にて、平安北道廳所在地で、清露南役に我軍の渡渉点として、耳に響けるは、此の邊にして、江岸の丘上には、統軍亭あり。對岸には九連城がある)自分とO君は、營林廠自修舎へ這入つた。自修舎とは、獨身官舎にて、丁度學校の寄宿舎的で一室に一人乃至二人宛三十餘名の獨身者が、自修制度の下に所謂チヨンガ生活をして居る處である。炊夫や風呂水汲み等には、ヨボボやニヤヤを使役してゐるので、時には日本語も朝鮮語も支那語も英語も同時に使用される事がある。例へばヨボヨボカイケイデフライモツテイと、いふ様を調子で、かか／＼たもしろい。初の間は一寸朝鮮語か支那語か區別がつかぬので、ニヤヤキミチオシヨ(オイ漬物オ出デナサイ)と省略語を使つて、大きな顔してゐて笑はれる人も有つた。

翌十日朝鮮總督府營林廠業務課調査係を命ぜられ、茲に朝鮮の立派な役人様となつた。左に營林廠の事業を抜萃して見よう (未完)

隨筆

東西南北

茶化子

○我輩今東都にあり。其の前は陸奥の南津輕にあり。然して母校は信州西筑摩。其以前は越後の北蒲原なり。即ち合せて東西南北とす。

○誰も同じ事だが卒業すると、メツキリ校友にあはん子、それも無理はないさ、南は赤道直下から北は五十三度、東洋から西洋、甚だしきは彼の世まで、赴任した者も少くない。だから中々に機會はあるまい。

○僕輩東西南北に放浪すること此處に年あり。此の間會門出身者に會するもの、左の八氏、外に恩師一名あり

○大正三年夏 種倉隨道君 突然であつた。暑中休暇を利用して、佐渡に來遊せりと、僕が歸國するや「もう長いことあはれんさかい」といつた君、將に一年振りである。同郷の土屋弘平君と三人眞野宮に詣つた。暑い日であつた澤根瀧の出帆、小舟に揺られて行く君、濱に残る二人、今尙忘られぬ、其の歸

途華山氏の演説を聞いた。月夜であつた ○大正五年春 青森にてあふ可かりし伊藤徳之丞兄、及訪問す可かりし藤卷壽一氏(未見)と文言を交はせしのみ、甚だ残念なりき。

○大正五年夏 宇佐美周紫氏 新潟縣廳に往訪、初對面だ、頗る御多忙に見受けた。縣民の評に曰く「好官吏」と御自重を祈る。

○大正五年秋 大澤國男君 君とは數ヶ月目黒に同勤せり、今信州田にあり、當時鼻を病みし君、其後如何に……同人評して曰く「名前許り大きい」と失敬

○全年秋 細江七兵衛君 印象多き神田旭樓より一書あり。即ち行く。論語ではないが、友遠方より來る亦樂しからずや、日立鑛山赴任の途ありと「久し振りだチー」もう四年だ「因に君中々の美鬚を貯へてゐた。

○全年秋 七宮先生 意外にも亦嬉しかりき。校長會議列席の先生に見ねんとは、昔乍らの温顔、殊に懐し、今に變らぬ御親切、感謝の外なし未だ報恩の万分にも、達せぬを遺憾とす

○大正六年春 野中高就君 某日留守後へ「ノナカ」といふ人がきましたと云ふ。眞逆に松代の君でもあるまい名前の間違ひ位に思つてたら、矢張り君であつた。「何うして分つた」林友を

見て「何處に居る」澁谷の農夫と君其後音信を如何せしや。

○全年春 柏澤國治兄 兄より來信あり。某日土京云々と、即ち其の日金縁フロックの一紳士を迎ふ。當時僕繁忙のため、十分なる御満足と與ふるを得ざりしを謝す。其後厚き御禮狀に接し却て恐縮せり。僕よりも、謝狀を發せしも、山梨縣廳、南及中巨摩等郡役所等の符箋にて返る。今長野縣廳にありと聞く。幸ひに御健在を祈る。

○全年春 久保田吾良君 柏澤兄の來りて幾許もあく、再び級友の君を迎へた。恰かも全日は、僕の叔父を上野に迎へし日、即ち飛んで歸る。「ヤーヤー」健康はどうか「相變らず黒いチー」筑波の笹を視察した「夫れから立つて目黒の竹林を見た。再會を約したが未だ其儘である。

○全年春 此外白河の原田洋平君より來遊せよと來る。君今や亡し嗚呼、又是も故人の高橋博氏「未見の儘」上京、來訪すべかりし由なれども其事無かりき。其の頃關西邊の農學校教師大澤君を尋ねしも、全君は轉任の後なりし、僕思ふに或は大場先生か

○全年夏 再び細江君 下谷より電話あり。女の聲にて「細江さんが養生院にゐますから、御知らせします」と、何の用で來たのか、養生院は寺

か病院か、サツパリ要領を得ない、人から救へられて、根岸の脳病院に飛込み、面會させぬ、させろの大滑稽を演じて、漸く岡田博士の養生院と知れた。鼻の施術で身動きも出来ぬ始末、其の後も數回會つて懷舊談に耽つた。

○全年秋 吉田佐十郎兄

日光に於ける下野山林會を機とし、面會を約せしが、事情ありて果たさず。其後某所にて奇遇せり、何れも先を急ぎしため、十分の快談を得ざりしも、再會を約して別る。風采堂々たり。蓋し蘇門系の重鎮か。

思出の旅

越 畔 生

九月十五日 曇 東京發伊香保泊
*信越線の不便何だ自分の國の線ではいかつて然り、然るが故に尙叫びたい希くば復線の日を文明よ……

*高崎電車の不快 是は驚いたチツボケな箱が又二つに仕切られる電車に青も赤も空いてりや双方構はんといふ調法なもので、イヤ窮屈、たまげに動搖の激しいつたらない、ヤレ交換た糞運れつちまふわー徐ろい、ア、厭きた、
*秋の伊香保温泉 漸く長い、ヤトリ線から脱したが今度は霧だ、榛名の山も上州平も残り惜しいが、是非があい流石は

*雨の山越 峠は上り一里半、行く、ハ、ンケチで鼻を蔽ふ、硫臭の追及には閉口、彼時は四拾幾名今は即ち一人ボツチだ、J君がセヴンの靴を負うたも此の道、其又靴は母校出立前、胴上げされて主人公の足を挫いた代物だ。

*物騒な中禪寺湖畔 下から雨が降る所はもう頂上に近い、やがて下りた所が拾ひも拾日も前「熊人を噛む」の新聞記事があつた其處を通らねばならぬ、頗る不氣味だ白状するが其時は舟にのる元氣は丸でなかつた従つて旅も暫く打切らねばならぬ (終)

御料林視察之記 (承前)

九月六日 木曜日 横 井 生

御嶽登山者の鈴の音に、まごかあ曉の夢は破られ、朝食をすまして、持つものはむすび二つの輕装に身をかけたため、旅館を後に鹹川なる伐木事業所視察の途につく、今し希望多き曙光は奇しくも東の空に匂ひ、千里一点の雲翳もなく、澄みわたる水よりも清し。得意のナカノリサンを歌ひつゝ木橋の畔にいたれば、稻は早くも實りて、涼しき秋風に吹かれ黄金の波を寄す。野面は、夕の露未だ乾かずして、虫は優しくも尙歌ひ續け、様々の花はたのがせに

天下の伊香保だ、温浴の氣分は亦格別、宿もよい、然し山腹の地だけに總てが高、道も急傾斜なので此春東京から来たS夫人も「未だよく存じません」といふ。

九月十六日雨 伊香保發開藤泊
*雨中の美林 緑に包まれた檜の森を町を後にして歩く方が早いと聞き(實は電車に乗り後れて)二里澁川まで急ぐ此の邊

一帶に杉の若林が打續く、山中の新道は詩趣が多い、草刈歸りの少年馬子君と後になり先になる、「これでもう休みた」つて成程呑氣そうだが、途中「常盤ノ水」云々警察の立札があつた。

*群馬平原ノ横斷 澁川より利根軌道三十分も待つて漸く發車前車(高崎水力)と切符が違ふの違はぬの騒ぐ、今日は二車連絡であつて黙乘其の癖道は一本だ、走る、愉快、暫しは利根の水流と競ふ

*前橋の一瞥 一婦人が嘔吐を始めたので時節柄オヤツと神経過敏になる、「日本一の製絲場」といふ聲がある左手に煙突が並んでる、寂しい市街だステイションの廣告は蠶業物ばかり、汽車満員は何處の祭禮か。

*桐生の二時間 又も待つのか、ホト、困り果てた、小山廻りにすればよかつた鑛夫體の奴がある〇〇鑛山事務所の法皮も見わる、「……今日は主人を迎ひに」
*募集と思つて……」など話聲がする、足尾も近くなつた。

*渡良瀬川の逆行 懐しい旅行跡を反對に向ふ、彼の橋は……此の家……汽車は知らずに飛んでるガタ馬車を追うた崖、道中の毒消賣り、果ては此の鐵道工事の土方組、なんぞ止度もなく浮び出る連れのS君とJ君は今如何に……故人のS君も眼前に見る様だ。

*大間々の昔、當時の終點、一同驛前の茶屋に憩ふた、たかみさん曰く「越後の方がおもしろい」と僕はある、と出た、彼のためかみさんよ、僕が今六年振りて此の地を通ります、大正三年に出来たといふ政府の工場は何を造るのか附近でも分らんそうか、サテ、西歐の戦ひは此の山中まで響くのか。

*夜汽車の旅愁、乗客は何れも物騒を手合許り宛然鑛山獨占の態、然し存外の親切である、後に此の一人から宿案内して貰つた、外は雨だ、山氣は身に沁む、仄暗いランプが心細い。

*花輪の懐古、寒村の宿裏は河原に臨んだ家二階もあつた、何も見る所のない夕、河原の散歩もよかつた、H君もゐた、今は停車場が出来た。

*間藤の旅舎 朽木屋で思出すは、例の南京當時被害の面々殊にK先生は見るも氣張つたが、矢張り免疫性ではなかつた翌日瘁いこと、
九月十七日 雨 間藤發中禪寺泊

咲き亂れていと艶あり。彼の村よりの花賣りに買取り、女郎花、桔梗などを憐れと愛づる都の人々よ、一たびは晨の露に濡ぬらし、秋の野に逍遙せずや。橋をうち渡りて帝室林野管理局王瀧分担區官舎にいたり、待合すること、三十有餘分にして、同官舎を辭して、道を鹹川にさる行くこと十數町にして、瀬戸なる御料局苗圃にいたる。安藤技手の話により、當苗圃の概要を左に記さんに、

- 苗圃面積 四段一畝歩
- 苗 數 拾四萬五千本
- 一坪内ノ
- 苗 數 百五十六本
- 計費(一ヶ年) 三百五十圓
- 施肥(一回) 油粕、木灰等
- 除草(三回)
- 害 虫 根切虫、土龍
- 枯損歩合 一割五分

聞くところによれば、當苗圃は土性砂土にして、理想の苗圃なりと云ふを得ず、殊に夏に於ては圃地の乾燥甚だしく、苗木の枯死するもの多しとの事なり。夫より道々鬱蒼たる森林を眺めつゝ、王瀧川に沿うてのぼることしばしにして、鞍馬に亞げる絶景と稱せらるゝ水ヶ瀬にいたる。兩岸斷崖數仞、怪岩斗出して、巨巖疊珂たる真只中を一條の白龍珠を吐き、漲然たる水上一の浮ぶものなし。深潭盪を湛へたる淵には、細魚無數群をかし。實に幽靜の詩境なるも、

- 一、伐木面積 四十九町歩
- 二、樹 種 檜
- 三、伐 積 立木(八万石)
- 造材(六万石)
- 四、事業着手 五月一日
- 五、伐木従業者
- イ、監督機關
- A 幹部 伐木係(専任)七人
- (内會計一人(兼任)壹人
- B 補助 會所付人夫 杣總頭壹人
- 杣總頭格壹人 代人 八人
- ロ、人夫定員
- A 杣夫定員 十四組壹組二付十二人
- B 運材夫定員十八組全 二十五人
- C 仕上小杣 三組 全 二十人
- (されど本年の如く人夫少き時に於ては到底定員をみたす事能はず目下三百人位を使用しつゝありと)
- 六、造材種
- イ、普通材 二間材、一丈材、一間材
- 半間材等
- ロ、長材 三間材以上(當材木事業

七、賃金

イ、會所付入夫 所造材積六万 石中三百本位 最高 壹圓五拾錢(食費加算) 平均 壹圓拾錢(同)

ロ、運材夫 最高 壹圓拾錢(食費加算) 平均 七拾錢(同)

事業所の大略は大方右の如くなるも、ここに特に記したときは、運材装置中各事業所に於て使用せられたるウスの代りに逆勾配なるものを使用しつゝある事あり。即ちウスに於ては壹間より小さき材は通常七十%位は通過せず。何れも壹度とゞまりて作業を甚だ遅緩ならしむれども、逆勾配にありては如何なる小材なりと雖、無事に通過し作業上甚だ便多く且つ速かならしむこの逆勾配は、木會支局内藤技師の考案により、吾々の先輩たる河合清行氏の手によりて、作られたるものなりと北原主任は語られたり。かくて事業地を辭し、柳小屋等を巡覽し、再び會所に至り、茶葉の接待を受く。それより當日特に、吾々のためになし下されし伐木の實際を見學し、且つ樹高の目測の練習をなしたり。ここに於て昨日今日二日間、生等のために、種々の便宜及勞をこられし北原伐木主任及其他の方々に深く謝し、會所を後に歸途につく、かくて午後四時、一行は無事王瀧の宿に引き返す

時また早しとて、思ひ／＼に杖を曳く、程なく夕日は、山の端にしづみ行き、明星の次第にくれ行く山々の上、に目をひらき明日の日出を約するが如し。月は東山の上に出で、斗牛の間に徘徊し、薄く幽かに、朦朧としてさながら夢の如く、遠く流る、王瀧の流れは、秋の夜の沈靜を破りて滔々たり。

山林學校便り

○運動會 本校第十七回運動會は十月廿二日舉行、折しも晴天に觀客、堵をなし數拾番の競技は順序よく行はれ午後五時無事終了せり詳細は全會記事に譲る

○觀楓遠足會 十月廿四日、校友會遠足部にては觀楓の爲め宮越附近まで遠足を試み旗揚八幡、南宮神社、德音寺等に賽し一日の清遠を試みたり但し紅葉は時期尙早く青葉勝なりしは遺憾ありき

○拜賀式 十月卅一日天長の佳節を迎へ恭しく聖壽の無疆を壽き奉れり

○辯論會 十月廿七日午前九時より例會を開き辯士十數名の演説あり餘興として東京松林伯圓の講談を聴き夕刻散會せり

○庭球弓術大會 十一月十日午前九時より兩大會を校庭に催し日頃の妙技を發揮せるが職員も皆參加せる事とて頗る興を添へ野次も中々猛烈を極めたり最後に會長より優勝者に對し賞品の授與ありて夕刻散會

○聽講 十一月十二日午後一時福嶋小學校に於て伊豆少將の乃木將軍に關する講話あり一同聽講す、少將は乃木將軍の幕僚として旅順攻圍軍に參せし外同將軍に親炙する事多く最も將軍を知悉せる人なれば其説く所人を感激せしめずんば己まざる概あり一同大に教訓を得たり

○中田助手退職 中田本校助手は今回靜岡縣周智郡氣多、王子製紙株式會社支社に入社する爲本校を退職する事となり十二日辭令に接せしを以て同日講堂に於て告別式を行ひ校長の送辭生徒總代の送辭あり中田助手の之に對する答辭ありて式を閉ぢたるが同日午後二時の汽車にて一旦歸郷の途に上れるを以て職員生徒停車場に見送れり尙同助手は本月六日を以て左の通り昇級の辭令に接せり

木會山林學校助手 中田 穰 月俸拾五圓給與

第十七回運動會記事

大坪 時 治 日行き月來り天地落葉の秋空明一氣の空には一点の塵翳なく抑塞なく玲瓏として透徹せる何ぞ超脱の氣象の饒かある。

自然の萬象はあらゆる徽號の薰染即ち春草夏木の形式より歡念實在の世界に歸り人情又一切の虚飾と形式を脱して真我本然の聲に歸らんとし全く自然の真我と吾人の真我とは舊相識の如く相逢ひ相語らんとす。

此時に當り我が校に於ては十月二十二日を以て第十七回の運動會を開催すべく發表せられたり。是れ我等が爲に活躍勇奮眞に體力試練の時季に非ずや。數日來より屢々日誌の頁を汚したる天候は二十一日に入り快晴の文字と改まり概ね各部の準備も部員の精勵ある結果により山なす萬障をも排除し盡して廿一日夕刻までに總ての用意を整ひたり

午前 之部

二十一日の夜は漸く混沌の境を脱して旭日東雲を破り東天に懸れば會場に既に裝飾を施して壯快なる氣分場外に溢れ靈鷲たる瑞雲天邊に舞ひ地には紅楓錦を着けて爛然たり先づ正門に至れば裝飾部員の精巧ある技術によりて成れる樅の大綠門、觀覽の群集を吞吐して旺氣の二字を納めたる大扁額と共に碧空高く巍然として聳立し恰も磅薄せる本日の盛況を語るに似たり

取り毀つは惜しきほどの受付席あり是より眼を左すれば高樓亭々たる時計臺振武軒音樂臺等の建物羅列し眼を右轉すれば昨日の弓場は今日の茶菓店となり雄飛亭と銘打つたる様げに／＼もの／＼殊に正面大玄關は今日しも賞品部の占領する所となりて紅白の幔幕は周圍を圍繞し内には賞品堆く小山を築き優勝旗は朝風に翻りて恰も名譽の旗手を待つが如し

○此の旗や此の賞や誰か胸に輝き誰か手に歸す運命豫め知るに由なれども今日の晴れの決勝を兼ねて自信せる血氣の猛子もありぬべし

又玄關に隣れる軒に赤青緑の染分したる大文字を釣るし會報部と標する一室あり

前には樅の木立に紅菊をちりばめ一雙の鹿を遊ばせたる風情げに／＼牝鹿かく嵯峨野の奥を偲ばせ幽渺瀟瀟たる有様なり即ち此れ今日の競技に一段の興味を添ふるべき余興部員の控室にして鏗々たる文筆の士を網羅す總ての準備は將に整ひタイム又ベギールを迫る時に校庭の一方に轟然たる爆音あり音響は天に沖し八紘に響くかと思へば忽ち外山の峯に聲ありて場内既に色めき立り見渡せば霧氣横溢の健兒百五十場の中央に整列し茲に壯嚴なる開會の式は與行せられ再び起る銃聲に血湧き骨鳴る競技の場面は演出せられたり

即ち第一には全校生徒のフットボール百米突と序を追ひ順に従ひ競技の數は何等の濼

瀟々圓滑に進行せり氣は高く空清し天賴地賴又我れに聲援し續々と詰めかくる觀衆は忽にして十重二十重の人垣を造り優しき手もて萬歳をさけぶ少女ありほくそ笑む姫あり老若男女嬉々として我等が演じ行く競技に或は興じ或は狂ひ寂寥たる杭が原原頭は時ならぬ歡樂の園と化しぬ

選手は何れ劣ぬ猛者なればスタートをダツト、セットの合圖諸共身を躍しては柵を越へ魚鱗と潜みては網をぬけ丈余の梯子を乗り超へ／＼我が行先に鐵壁あるとも何のそのごとゴールに飛び込む輩、是れしきの校庭幾周すればと何かあらんと意氣揚々とかげ出す英姿さては氣息奄々たる飛脚競走奇々妙々たる御白粉競走、パン食競走入り替り立ち替りスタートに現はる、壯士一技より精を込め能を盡し一舉一動皆圍繞する觀衆の目を引き心を聚め手に汗を握らしむるのみ

校庭南隅の時計十二点を報すれば午前の競技は既に盡されたり

午後 之部 晝食既に終りたれば本日の呼物たる假裝の支度にかゝり僅々數分にして隊伍整ふ見よ健兒百五十が一ヶ月の焦心考慮の痕を實に慘然たる苦心の経路は隠然たる内に輝を發し途に燦爛たる現實の姿となりて表れ滑溜滑稽、珍無類、奇想天外、抱腹絶倒、怪又怪、奇又奇、本職跳の光景なり時に高臺の時計〇時三拾分なり折しも西南方に當りて

音樂の響き起りしかと思ひしが、應に群集を押し開き、先導として出て来る一隊あり、是れ山をなす群集が今や、連し、待ち、侘ふ、我が奇装大隊なり、此時に於ける群集の心理や如何見渡せば、小者あり、中間あり、神官宮人將官兵士職工官吏、賣賣買乞食、非人、は云はずもかな、六尺棒に夜蕎麥を喫く、冠をんより墮落のはての、バウリン、ボラネを囀る薩摩の軍人、ねんねが守りの御轉婆娘、ては万緑叢中紅一点の西洋婦人、裳裾輕げに時からぬコントラストに妙を湛へ、細腰纖々として窈窕たる立姿に、楚々たる歩を運び、運枝の契け幾千代迄も變らじと、ハイカラ紳士と手を取り交す新婚旅行、雨刀たばさむ天晴の武士三衣一鉢に、修行の巡錫足も輕げに運び行く高僧は、ては武運拙く運命加護の天恵に洩れ、各に忍ぶれど、尙北荒す嵐のをしばしが、間宵、立ち出でし義經郷音のはげしさに、月の都、進む勸進帳の御供かしこみ、安宅の關に行き、この辨慶姿あらゆる社會古今の人事万象、とごとく網羅し盡せる有様、唯、觀衆數千人をして、啞然たらしむるのみ。

巒背稜々、肩から落ちて、水に足もどる袴を穿、も、身細の行装、御自慢の闊犬引き、其し、悠々、歩する、後より、歡喜に満てる群集、よら、は、囁き、其立、つ、闊犬一場の光景、實に、奇なり、出で、奇に入り、妙より、出で、妙に入り、觀客幾千の歡聲、野に、満ち、山に、溢れ、谷を、埋む、一隊は、此等の歡呼、場袖に、迎へ、られて、場を、廻る、事、二回、再び、奮に、復すれば、グラウンド、又、競技の花と化す、天は、高し、弘氣は、空明に、漂ひ、秋日、麗々とし、て、紅葉の表を、照せば、一段の、輝天地の、間に、生じ、絶好の、運動日和、あり、午後、に入り、て、觀客は、彌、や、増して、流石の、運動場も、立錐の、地なし、移り、行く、競技の花は、小學校、生徒の、大江、山、浦島となり、紅顔の、面、紅葉の、雙手、其の、可憐なる、有様は、荒くれ、立ちし、吾等が、胸に、恍惚として、浸み、入し、しが、程は、我を、忘れて、佇む職員、來賓、卒業生の、競技も、すみ、て、各、小學校、選手、の、米突、競走、あり、小なる、彼等は、如何に、ベストを、盡して、走れる、よ、小なる、應援隊は、如何に、か、り、彼等の、聲を、張り、上げた、る、よ、優勝旗は、遂に、小學校の、手に、落ちぬ、其の後、支數番、から、ずして、落陣、西山に、近づき、れば、千五百、の、大突の、大競技に、今、井、井、井、上、の、細窪、小池、中村の、運動會も、目出度、最後、として、第十七、回の、大、名、出、度、終りを、告る、に至り、茲に、我等、百五十、有、再び、運動場、に、集合し、校長の、閉會の、辭に、次ぐ、正、校歌を、高唱し、三度、山林、學校、萬歳を、呼號す、れば、餘韻、清水の、碧を、湛へ、たる、か、如き、夕べの、

夫空に響き八千の溪に流れて、恰も我等が前途を祝福するが如し、日落ち月登りたる場内、狼藉たり、時に一吟の、歌句あり、混戦の後もの、すこし、月の色、(盲言多謝)

校友會便り

秋風清き、十月二十七日の朝、フレッシュなる、講堂に於て、我が辯論會は、縣下中等學校聯合マツチ選手慰勞會を兼ねて、催されぬ。

幾多論壇の、雄將猛卒が、燈火に親しみ、机に爪立て、或ひは切齒して、搾り出したる、名論卓説、やがて壇上を、花紅葉に化して、我が杭の原、原頭に、一大光燭を、あげぬ、いでや左に芳名を掲げ聊か安評を試みん。

開會の辭 唐澤部長
選手慰勞の言葉 七宮校長
現代の青年は須らく淡白なるべし 矢野祐君
矢野君の辯舌は四國特有のもの、あれぞ未尾、不明瞭にして、且つ生氣なかりしは、演題にて、驚かされし聽者も、少しく啞然たる氣味なりしは、記者の惜しむ所、

服従と反抗 矢野忠三君
演題、苦しく、聽者の苦心、一通りあら、所謂修身講義、新し、人上でも、言、

たら、實の生へて居る位は、御手、か言ひ草、今少し卑近な例を、取つて、はしかりし、然し熱心なりしは、君の長か、益々奮勵せられん事を願ふ。

五分間の價值、六、井上、新次郎君、西洋の英傑、(オレオの言、今更君の、舌によりて、賞揚せらるる、にも非ざれ共、其の言は所は、か、短分間演説として、は好適く、且元氣あふしも、聊か龍頭蛇尾の、嫌あしとせず。

偶感 安藤清吉君
重々しい頭を振り、重い調子で論する言は、眞に君の心の叫び、「瓦々とは言ふが」と諄々と説く所、當に堂に入り、と言ふべきか、然し聽者の喧騒を鎮め得ざりしは遺憾、「聽者を傾聽せしめ得るは、雄辯家なり」まだ、此處に至るには遠い、

赤裸、伊東厚君
演題が黒板に、白々と書かれた、六尺有餘の長身を壇上に運び、君獨特の快辯を以て諄々と長短を説き、遂に寄宿舎の實狀に及んだ、舎監先生の不意の襲撃に驚かされ、てしばしたため、共、中途にかゝる鶴の一聲やむを得ず、壇上を下りた、

其の萎れた姿よ、聽者は再度の、登壇を望んだけれども、其の時は既に、萬事休矣然し君の露骨なりしは、辯論の核心を、つまむには、肝要なる事からんと、思はる、

(YM生評)
長野土産 内田新之助君

幸あるか、君は長野にて、ピクトリーを得た然し「勝利は時の運べ、を盡すの如何にあり」の語を以て、謙遜した、君として有り得べき事だ、だが其の面地には、勝利の影が潜んでゐると思ふ、更に言ふ君は、擊劍部長たる、君の、活氣が無い様に思はる、

選手附添として、西澤先生
先生を宛角言ふのは、こがましく聞ゆれども、聊か感想を述べん、

長野の實況を、詳に承はれども、此處に載出し得ざる、記者の無能を恨む。

先生は、擊劍の顧問であるだけ謙遜して、徒歩部の不利に終りし理由を長々と説いた、いつもか、が先生獨特の長口舌には、恐縮の外なし、

長野土産 井上寛一君
「山林學校の生徒は、敗けても愛嬌がある」と長野にて歌はれし、徒歩部を代表して、壇上に愛嬌を湛へた、君が逃る、如く壇を下りしは聽者の惜しむ所、

偶感 今井徹郎君
君は確かに能辨家だ、今日の花形辨士として、記者は推奨する、いつもながら君の多讀多見には驚かざるを得ない、

然し思想豊富の爲か核心をつまむ能はざりき、君が職員まで代表して、慰勞の辭を述べしは、非難の聲もあらうが、其の元氣は當によりしく吾々の見習うべき所、併し此の時感じたのは辯論は長い許りが能じやない

- と云ふ事である、
- ××× ××× ×××
- 壇上の花瓶も、辯士の挨拶に暖あらず、互に大氣焔を揚げ、口角泡を飛ばし、時の移るを知らず、辯士數名残りしも、最早や腹の虫も承知せず、遂に晝食とす、
- 時正木十二時半なりき、
- 午後一時より、松林伯圓氏の談話あり、
- 前原伊助傳 伯圓氏
川中島 同
- 百五十餘名の校友は、ひたすら感歎し或は手を握り足踏張りて氏獨特の妙話を傾聽せり伯圓氏の壇を下る時は時已に黄昏を告げ四山淡靄もて罕められぬ、
- 十一月十二日、火鉢の傍にて、A生
- 林友代領収報告
- 金壹圓 中田辰雄君
金壹圓 中田穰君
- 高橋氏吊慰金報告
- 金壹圓(現) 伊東兵太郎君
金壹圓(現) 松澤莊太郎君
金壹圓(現) 温井誠二君
金五十錢(現) 梯殿正雄君
小計三圓五十錢累計四十八圓五十錢
- 謝恩金申込報告
- (征矢野書記分) 第四回
金五十拾錢(現) 久保田吾良君

金五拾錢 (現) 渡邊 知 則君
 金五拾錢 (現) 岡 西 猛君
 山 村 次 生 三君

金壹圓 (現) 原 七 郎君
 細 江 七 兵 衛君
 宮 島 岩 見君

金五十錢 (現) 千村 彌之助君
 小計三圓累計十二圓九十三錢

(大場教諭分) 第三回
 金五十錢 (現) 久保田 吾 良君
 金壹圓五十錢 (現) 渡 邊 知 則君

山 村 次 一君
 原 七 郎君
 細 江 七 兵 衛君

金貳圓 (現) 宮 島 岩 見君
 千村 彌之助君

金五十錢 (現) 小計四圓五十錢累計十四圓十錢

(加藤書記分) 第三回
 金五十錢 (現) 渡 邊 知 則君
 金五十錢 (現) 岡 西 猛君

山 村 次 一君
 原 七 郎君
 細 江 七 兵 衛君

金五十錢 (現) 宮 島 岩 見君
 千村 彌之助君

金五十錢 (現) 小計二圓累計六圓七十三錢

(福山教諭分) 第三回
 金五十錢 (現) 岡 西 猛君

山 村 次 一君
 細 江 七 兵 衛君
 宮 島 岩 見君

原 七 郎君
 千村 彌之助君
 小計壹圓五拾錢累計六圓七十三錢

大正六年十一月廿三日印刷
 大正六年十一月廿五日發行
 長野縣西筑摩郡福嶋町四〇四番地

編纂兼發行人 安 井 正 夫
 印 刷 者 長野縣西筑摩郡福嶋町五七〇番地 川 崎 本 雄

印 刷 所 長野縣西筑摩郡福嶋町五七〇番地 川 崎 印 刷 所
 發 行 所 長野縣西筑摩郡福嶋町二八九番地 蘆 澤 書 店

祝開業四十周年

記念出版

赤星長野縣知事題字
 本多林學博士序文
 島崎藤村先生序文
 九山梓水著

木 會 特價五拾錢

紅葉の木會 金拾五錢

▲繪はがき六枚一組▼
 長野縣木會福嶋町

藤森書店

振替東京八一七七
 電話三十九番

活版石版印刷

川崎印刷所

長野縣木會福嶋町

電話【二十二番】

諸官衙御用達

長野縣木會福嶋町

蘆澤書店

電話【四〇番】

木會の

なかのりさん

【特價金貳拾錢】

◆每月廿五日發行 【定價金參錢】